

# 特集 アメリカ合衆国

## 言葉から探る文化と社会

平井 秀和

ナイフ を辞書で引いてみると、西洋風の小刀、などとなっているけれど、このような説明は、明治や大正の頃ならいざ知らず、日本人の生活の中に溶けこんでいる現代では、もう不要な説明となっている。アメリカの辞書では 台所用品となっているナイフも、イギリスの辞書では、武器としても という説明が加えられている。イギリスでは、ナイフまで武器とみなすほど、まだ、安全な社会であることを示していると言える。小・中学校でも、休み時間にgunによる殺人が頻発するアメリカでは、ナイフまで武器として、辞書に記述する意識も余裕もないのだろう。

こういう調べ方をしていくと、辞書には、単に、引くだけではなく、読む面白さもある。

イギリス人の観るアメリカらしさとして、Oxford Guide to British and American Culture (1999:p.98)では、次の4つを挙げている。

power in international politics [世界の警察官・アメリカも、湾岸戦争などで、外国からの資金援助なしには戦えなくなっているところを見ると、そのpowerも、相対的に低下してきているのは明らか]

Hollywood [trashyでcommercial culture のシンボルとしての町・Tinseltown]

money [Money matters more than anything else to Americans;brash displays of wealth]

violence [The US is a dangerous place where you cannot walk in the streets or subways without fear or being attacked.学校へケイタイだけではなくケンジュウまで持ってくるアメリカ；警官が夜間でもケンジュウなしでパトロールできるイギリス]

それにしても、戦後の日本は、アメリカをモデルに努力してきた結果、最近の日本は を除いて、見事にアメリカに追いつき、あるいは追い越してしまった感がある。それは、ニュースで毎日のように報じられている。

また、アメリカ人を can easily become excited and rudeでhave no culture だとしている。[rudeやcultureについての英米人のものの観方の違いは、英・米の辞書の説明の中に読みとることができる。]

しかし、アメリカ人のfriendlyで、welcomingで、hard-workingで、生活をエンジョイし、social classもなく、何事にもopenな態度、などについてはイギリス人も評価する。

一方、アメリカ人は、イギリス人をどう観ているだろうか。ジェームス・ボンド、アガサ・クリステイー、くまのプーさん、霧[最近では、無煙炭や電気の使用でほとんどみられなくなった]、山高帽[も、少なくなっている]、queue、fish and chipsそして紅茶...

イギリス人のpoliteでproper[この言葉の意味はなかなか掴みにくい。よく英英辞典で調べてほしい。]な態度には尊敬すらしている。またplease, thank you(very much),excuse me,lovely,holidayなどの中にイギリス人らしさがある、とも言う。snobbishで stiff upper lip な性格のため、かなり重大なことをでも'That's no problem'と言うunderstantementには、アメリカ人も、なかなかついていけないようである。食事のまずさとdullでrainyなイギリスの天候には、不満が多い。それでも、アメリカ人はイギリスを自分たちの故郷だと考えている。

会に途中で中座することをFrench leave [フランス人流の去り方]と言うが、フランス人は、こ

れをfiler à l'anglaise [= stip away after the English fashion]とやりかえす。Brewerによると文無しのことを、フランス語では 'je suis Anglè' [私はイギリス人だ]と言う、とある。こういうのをXenophobiaというけれど、これは、イギリス国内でも見られることであって、スコットランド嫌いでは有名なサミュエル・ジョンソン(1709-84)は、自分の編集した辞書の中で、oatsを「イングランドでは普通ウマに食わせるが、スコットランドでは、人間が主食とする。」と書いた。書かれたスコットランド人は、怒ることもなく「その通り。だから、イングランドではサラブレッドが生まれるが、スコットランドでは、すばらしい人物が輩出する。」と応じた、という。こういう英国的笑い〔イングリッシュ・ヒューマー〕で応じるゆとりは、生真面目な日本人では、おそらく通用しないだろう。

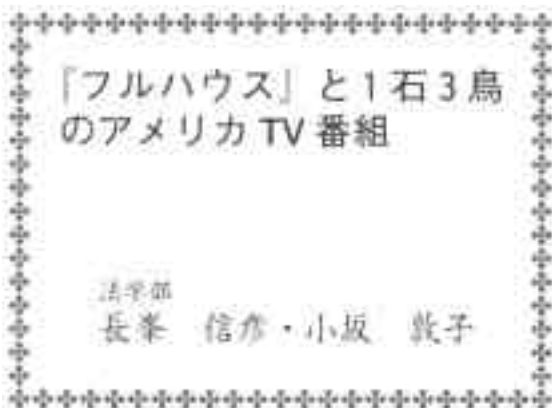
最近、『アメリカ人のまっかなホント』(第1巻)というシリーズ(現在、第24巻まで)が出た。『地球の歩き方シリーズ』が、実用的・観光旅行者向きであるのに対して、『まっかなホントシリーズ』は、国際化・情報化の激しい現代にあって、多様な世界を観る目を、主に、ことばを通じて養ってくれる大学生向き教養的啓蒙書で、楽しい読み物となっている。

最初の作品から実に10年近くも続いていて、その間俳優も声優も(あの『大草原の小さな家』のように)ほとんど変更なしという人気ロングランです。話はタナー家で母親が急死したところから始まります。残されたのは、潔癖過ぎるほどの綺麗好きで「趣味はお掃除」という父親ダニー、大人を手玉にとることを覚え始めた小学生の長女D.J.(ディー・ジェイ)、おしゃまでわがままな次女ステフ(5歳くらい)、そしてまた赤ちゃんの三友ミシェル。そこへ育児手伝いとして二人の男性が家族に加わります。ダニーの親友でコメディアン志望のジョウイと、亡き母の弟でちょっとカッコいいロックスターのジェスイ(主人公)。この3人の男性が3姉妹を養育しながら展開するドタバタが、実に楽しく、ジョーク満載で描かれます。

ある日父ダニーがTVリポーターとして晴れ舞台に立つことに。D.J.とステフはお祝いを贈ります。D.J.からはネクタイ。さてステフからは??かわいらしい手作りの品のようなのですが、誰にも何だかわからない。そこへ、製作者のステフがささず "Try on, Daddy!" (パパ、付けてみて!) ステフを傷つけない父、されど意味不明の品。まごまごしているところへD.J.が一言。「ネクタイ止めにしては結構イケてるでしょ?」長女が助け船を出してくれたことに感謝し、父は「おまえはいい子だ」とD.J.の肩に手をやります。その時の一言が、意外にもあの "God bless you." 畏まった時の表現と思いきや、こんな軽やかな使い方もあるんですね。印象的です。(最も初期の作品)

その後ジェスイはレベッカという女性と結婚し、彼女は妊娠します。レベッカは検査結果を告げる医者からの電話口で、ひどく興奮して「ウソでしょ! ウソでしょ!」("You're kidding! You're kidding!")と喜びを連発。何かと家族全員が心配して自分を凝視する気配に気づき、くるっと皆の方を向き、落ち着いてニヤッと一言。"He is kidding."(「(心配しないで。)冗談よ。)」kiddingの用法が一発で飲み込めるような場面です。

現在、NHK-ETVで毎週金曜日18時25分から放送中。また、月~木曜日まで、深夜0時50分から



## 何とんでも『フルハウス』!

『フルハウス』というアメリカのホームドラマをご存じですか?結構面白いコメディーなんです。